

第 27 回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会
2016 年 12 月 17 日(土)

会話分析のアプローチから みた会話の力とその実践

－相互行為への参加と協働－

政策研究大学院大学
岩田夏穂

はじめに お話すること

- 会話分析 (CA)とは？
- CA – SLAの流れ
- CAから見た相互行為能力
「学習」は記述可能か
- 教育現場への応用
 - ・教師と学習者の意識化促進
 - ・関係構築のための「雑談」への注目
- 会話教育が目指すこと

会話分析

Conversation Analysis(CA)

- ・始まりと展開
- ・分析プロセス

会話分析Conversation Analysis(CA)とは

会話は**社会生活の基盤**をなす営み

→行き当たりばったりに展開しているようでいて

実は非常に**秩序だって組織化**されている

どうやって？

→会話者の
やり方を記述

エスノメソドロジー

創始者：ハロルド・ガーフィンケル

アメリカの社会学者 (1917-2011)

<エスノメソドロジー> Ethnomethodology
(人々) (方法論)

人々が日常生活を営むうえで用いている、
見てわかる、しかし気づくことがない方法

(Seen, but not noticed)

継承者：アーヴィング・ゴッフマン(1922－1982)

CAの始まりと展開

H. サックス (1935- 1975)

会話という社会を構成する活動の精巧なメカニズムを記述

E. A. シェグロフ

行為連鎖の組織化、多くの会話分析の研究者を育成

G. ジェファソン (1938-2008)

データの転記法の確立、笑いの組織化

CAの重要な成果

- 順番交替システム
- 行為の連鎖

A 今晚ひま？

B うん

先行連鎖

A 映画見にいかない？

A 何見るの？

B 「君の名は」

挿入連鎖

隣接ペア

B いいね。

CAの重要な成果

■ 修復

聞き取り、理解のトラブル解決のための操作

自己修復 他者修復

A 明日の試験3時からだね。

B え？3時？

A あ、ごめん、4時だった

自己修復

B え、4時でしょ。

A ああ、そうだった

他者修復

■ 成員カテゴリー化装置

その行為者は、何者として行為しているのか

CAの分析プロセス

- ・データ：自然発生的な会話の音声・映像
詳細なトランスクリプト
- ・焦点： 言語・非言語リソースを用いてどのように
やり取りを組織化し、行為を達成しているか
- ・イーミックな視点：
研究者の思惑や期待、前提条件等を
切り離し、そのやり取りで当事者が何を
志向しているかに注目

CAの分析プロセス

- ・詳細なトランスクリプト作成



- ・注目する現象のパターンを抽出



- ・トランスクリプトから切り出した「断片」のコレクション



- ・現象の記述を精緻化 Why that now?

(Schegloff 1980:147)

CA – SLAの流れ

- ・相互行為能力
- ・学習の記述

SLAへの批判とCA

■ SLA（主流派）

言語の**形式**の習得に重点（**使用**と分断）

言語学習：個人の中の**認知プロセスの変化**

会話分析は
ただ現象を記述
しているだけで役
に立たない

■ 社会的な視点から

言語**使用**と**形式**は一体

会話分析は
言語学習の社会的・
相互行為的特徴を
とらえられる！

社会的視点
がない！

社会への参加によって達成
されるもの

Firth & Wagner (1997)

CA-SLA

SLA研究へのアプローチとしてのCA(CA-SLA)
“Conversation Analysis as an Approach to SLA”
(Kasper 2011)

学習者が相互行為に参加する能力
「相互行為能力」interactional competence

CAから見た「相互行為能力」

会話参加者が会話に参加できる「能力」

- …個人が所有？（口頭運用能力？）
- …相互行為の中で目に見える形で示し合う過程
局所的・偶発的・協働的に構築される

(Kramsch, 1986; He & Young, 1998; Hall & Doehler, 2011; Kasper & Ross, 2013)

- ・L2話者：相互行為の中で有能な会話者
- ・L1話者とL2話者が合理的に相互行為を展開している

「能力」が協働的に構築されるとは？

同じ学習者でも、相手によってうまく話せたり、話せなかったりする。同一の相手でも、状況が違えば、同じようには話せない。

自分ではうまくできたつもりでも、他者がそう思わなければ、能力があるとはいえない

CAによる「学習」の記述は可能か

学習の記述

—

CAのスタンス

できなかったこと
が適切にできる
ようになる

その状況での当事者の志向と
相互行為の組織化の解明

相容れない??

相互行為能力が
記述可能ならできる

学習機会としての相互行為の記述

■ Mori & Hayashi(2006)

意味と言語形式の結合を学ぶ機会

日本語L2話者(2名) 日本語L1話者(3名) のおしゃべり

L1話者が順番の終わりをジェスチャー

→ L2話者の意味の理解 →表現の産出

■ 柳町 (2009) 学習の帰属のプロセス

留学生アルバイト(新人と先輩) 2名

先輩の業務の指示→新人の学習の達成

両者の発話のユニゾンによって両者に「帰属」

学習過程としての相互行為の記述

- Nguyen(2011) 話題提示に対する反応
英語L2学習者(中級) と教師のやり取り
最小応答→応答の拡張→自分から話題提示
- 岡田 (2016) 相互行為能力の発達の要因
複数の連続するL2の面接試験のデータ
面接員の質問の組み立て方の変化
(前置きの仕方、具体的な表現への変更等等)

言語教育現場への CAアプローチの応用

- ・教師と学習者の会話への
意識化促進
- ・「雑談」への注目

言語教育現場へのCAアプローチの応用

- 会話展開への**教師の意識化**促進

Wong & Waring(2010)

- 会話展開への**学習者の意識化**促進

岩田・初鹿野（2012）

- **関係構築**のための**雑談**への注目

今田（2015）

教師の意識化促進

■ Wong & Waring(2010)

目的：話しことばの意識化、会話の構造の知識

CAの知見に基づく第二言語会話のスキルを
学習者に教える手がかりを提示

内容：CAが明らかにした会話のメカニズム

構成：現実社会の相互行為における体験

学習者が直面する問題を振り返る問い

→メカニズムの説明と理解を深める課題

→授業の流れとタスク例の提示

学習者の意識化促進

■ 岩田・初鹿野（2012）

目的 : 主体的にやり取りにかかわり、かつ相手と協働的
会話を展開する力の育成

学習者 : 初級終了レベル以上

扱う会話 : 親しい大学生 2 者間の日常会話（雑談）

シラバス : 雑談の表現・構造上の特徴から抽出

活動の組み立て :

会話の展開上のトラブルの観察と解決の
プロセスを通して、会話の実践を振り返る

学習者の意識化促進

- ・母語のリソース化

会話のやり方：普遍性がある

→母語でのやり方を日本語の会話でも参照

・・・相対化の促進

- ・自分がよい聞き手になること

→産出偏重の意識を変える

- ・受け手に向けた発話のデザイン

→相手の理解を配慮した発話の組み立て

トラブルが
起きている会話

不自然な箇所を指摘
自分の母語ではどのよ
うに話すか検討

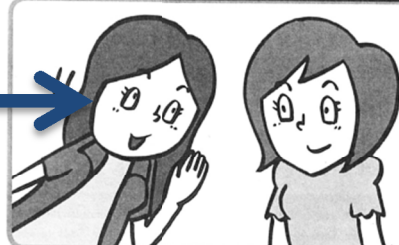
Unit 3

体験を おもしろく話すには…？

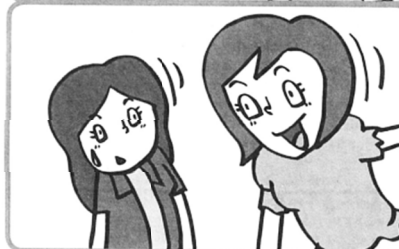
Telling an interesting story
如何把自己的经历讲述得有声有色？
재밌었던 것을 재미있게 이야기하려면…？

こんな経験ありませんか？

049

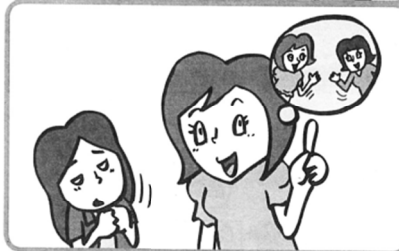


友子：昨日の夕方、駅前のスーパーに
行ったんだけどね、



奈美：ああ、私も行ったよ！でも、
雨降ってきちゃったでしょう。
傘持たなくて、すごくぬれ
ちゃった。

友子：あ…



奈美：天気予報で雨って言ってただけ
どさ、家出るときは降ってなかつ
たんだよね。そしたら、偶然友だ
ちに会ってね、その友だちが…

友子：うん…

友子はちょっと困っているようです。なぜでしょう。
あなたなら、こういう場合、どのように話しますか。
母語で話すときのことを考えてみてください。

偶然 / by coincidence, by chance 偶然 우연히

テキストを用いた「意識化」のための実践例

■ 国内：日本語教育に関心のある初年次学生 (30名)

- ・誘いを受けるときと断るときのパロールプレイをスマホで録画→実際にどのように承諾・拒否をしているかを自ら検証→優先構造の確認
- ・コミュニケーション上でのトラブルが生じているケースについて学生同士で議論と考察
- ・自分の経験の共有と解決方法の模索

学生の反応から

- ・話すことだけが重要ではないことがわかった
- ・これまでの自分のコミュニケーション経験での問題に対する気づき（聞き返しのしかたなど）
- ・こういった反応が求められているかを意識すること
- ・自分と他者の会話に対する俯瞰的な視点

テキストを用いた「意識化」のための実践例

- 海外：台湾の大学での集中講座（44名）
（初級後半～上級の混合クラス）
 - ・母語での会話のやり方と日本語で物語の語り方を検討
 - ・コミュニケーション上でのトラブルが生じているケースについて学生同士で議論と考察
 - ・ドラマ作成を通して自身が経験したコミュニケーション上でのトラブルの再現と共有

学生の反応から

- 人と人の話しはほんとに深いです。なん時、どんな言葉、どんな表現をするかよく習いました。
- 何でも考えした時、ほかの人にはっきり自分の伝えたいことを言うほうが良いと思います。
- 相手の立場を考えて、相手は自分が話していることはどう考えるのを推測しながら話しなければなりません。「会話」は一人で話すことではなく、2人のやりとりです。

関係構築のための活動「雑談」

雑談：人間関係構築のための重要な社会的活動
展開のパターンがないように見える
→体系的指導の対象にしにくい



CAによる日常会話の秩序の記述



雑談の構造が明らかになった
→会話教育における指導の可能性

会話を通した関係構築のプロセス

■ 今田（2015）

対象：留学生(2名) と日本人学生(2名)
その他の1年生メンバーとの日常会話

期間：2011年4月から1年間

焦点：互いのフェイスに関わるやり取り

→円滑な関係構築のための会話の装置

成員カテゴリー化装置を用いた褒め・自己卑下

をめぐる「共－成員性」（串田2006）

からかい・冗談の変化

おわりに
会話教育が目指すこと

おわりに 会話教育が目指すこと

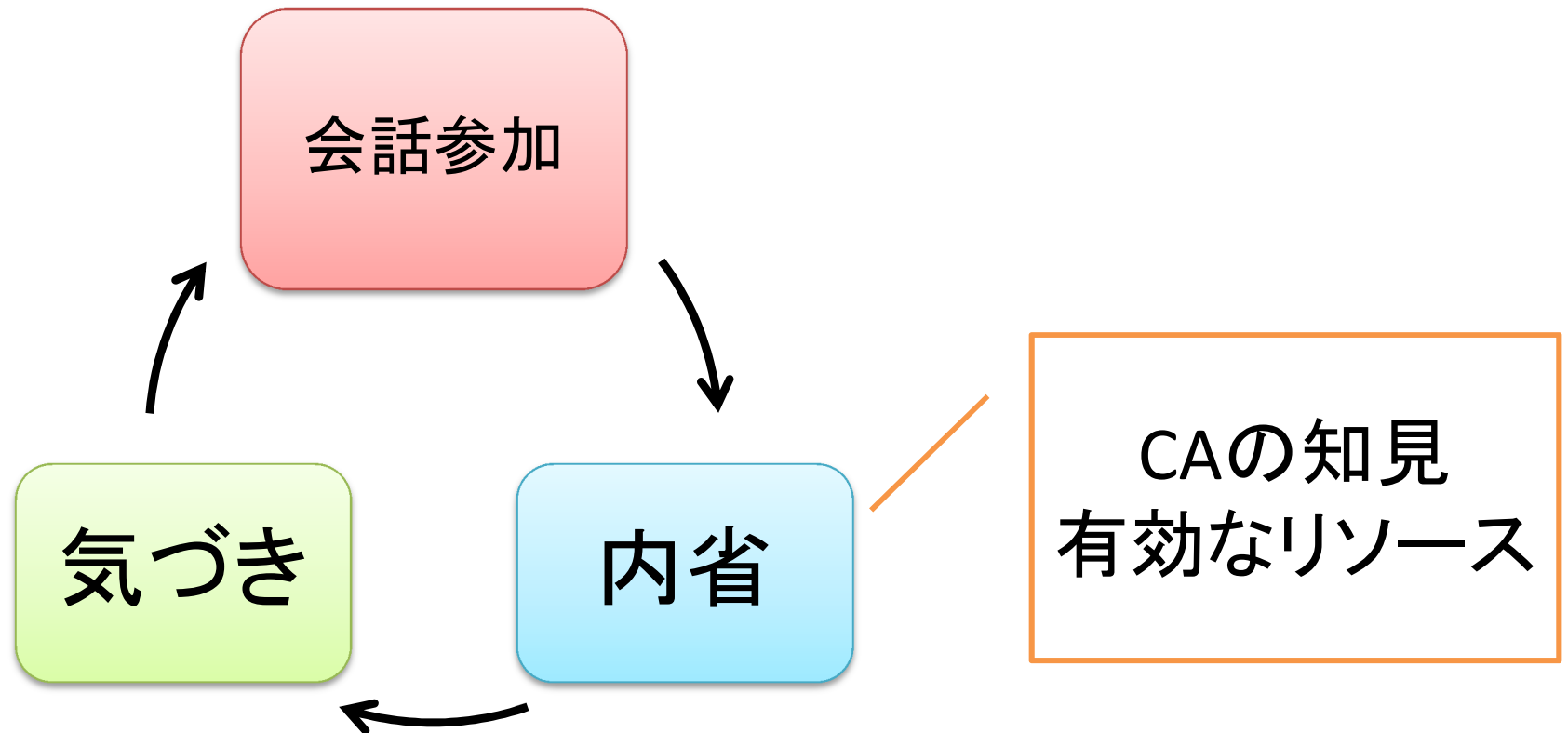
会話のやり方…学習の対象なのか？

相互行為に
参加するための
リソース

そもそも私たちは何のために「会話」をする？

関係構築
問題解決
etc...

おわりに 相互行為能力の育成とは・・・



学習者がやり取りを内省し、気づきを得て、自身のよりよい会話実践につなげる支援

実践と
検証

参考文献（予稿集にないもの）

串田秀也（2006）『相互行為と会話分析-「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』 世界思想社

Schegloff, E.A. (1980). Preliminaries to Preliminaries: 'Can I ask you a question'. In D. Zimmerman & C. West (Ed.), Special double issue of Sociological Inquiry, Vol.50. #3-4. 104-152.

ご清聴ありがとうございました